



韓国の道路に描かれた「ピンクの線」 —小さなアイデアが社会を変えるまで—

韓国を訪れ、高速道路を利用したことのある方なら、分岐部やジャンクション付近で路面に描かれたピンク色や緑色の線を目にしたことがあるかもしれません。初めて見る人にとっては少し不思議な光景ですが、これは「カラー誘導線」と呼ばれる交通安全施策です。

韓国では2010年代初頭から本格的な導入が進められ、現在では高速道路だけでなく一般道路にも広く普及しています。韓国で生活していると当たり前の風景の一部となっていますが、その背景には、一人の現場担当者の気付きから始まった小さなアイデアがあります。

カラー誘導線が誕生したきっかけは、高速道路の複雑な分岐部における交通事故や危険な車線変更でした。高速道路網が発達するにつれ、ジャンクションやインターチェンジの構造は複雑になり、運転者は短時間のうちに標識を読み取り、進むべき方向を判断しなければなりません。特に初めて利用する道路では、出口を見落とししたり、分岐直前で慌てて車線変更したりするケースが少なくありませんでした。

この課題に着目したのが、韓国道路公社の某職員でした。運転者が標識を見落とししたり進路を誤ったりする場面を目の当たりにし、「もっと直感的に進行方向を示す方法はないだろうか」と考えたそうです。

そこで生まれたのが、「色」を利用した誘導という発想でした。例えば、ある方面へ向

かうルートをピンク色、別の方面を緑色で表示し、案内標識にも同じ色を用います。運転者は文字情報を細かく読むのではなく、「ピンクの線をたどる」「緑の線を追う」という感覚で走行できます。極めてシンプルな仕組みですが、人間の視覚的な認知特性を巧みに利用したものといえるでしょう。

興味深いのは、このアイデアが最先端の研究施設や大規模な研究開発プロジェクトから生まれたものではないという点です。既存の道路インフラに色を加えるだけであれば、技術的な難易度は決して高くありません。しかし、「利用者がどこで迷い、何に困っているのか」という現場の視点があったからこそ生まれた発想でした。

実際に導入されたカラー誘導線は、運転者の進路判断を支援し、分岐部における混乱や急な車線変更の減少に寄与しています。その後、韓国各地へと導入が拡大され、現在では多くのドライバーがその恩恵を受けています。

新しい技術や制度は導入当初こそ話題になりますが、本当に社会に定着したものはやがて意識されなくなります。現在の韓国では、多くの運転者がカラー誘導線を当然のものとして利用しています。利用者が特別に意識しなくても機能する仕組みへと成長したこと自体が、この取り組みの成功を物語っているように思われます。

一方で、日本でもカラー舗装そのものは存在します。バス専用レーンや自転車ナビライ

ン、右左折レーンの強調表示など、色を活用した道路表示は珍しくありません。しかし、「〇〇方面はこの色」という形で標識と路面表示を連動させ、運転者を目的地まで誘導する仕組みは一般的ではありません。

日本の道路案内は標識や路面文字を中心に発展し、韓国のカラー誘導線は色そのものを情報伝達の手段として活用した点に特徴があります。利用者の認知負荷を軽減するという観点から見ると、両国のアプローチの違いは興味深いものがあります。

知的財産の世界では、高度な技術や画期的な発明に目が向きがちですが、社会に大きな影響を与えるのは、必ずしも最先端技術だけではないようです。カラー誘導線は、そのことを示す好例といえるのかもしれません。

この仕組みは特許技術として広く知られているわけではありませんが、交通安全の向上に貢献してきました。そこにあるのは、「どうすれば利用者にとって分かりやすいか」という視点です。知財実務に携わる者として、発明や技術の価値は権利取得だけで完結するものではなく、社会の中で使われ、受け入れられてこそ真価を発揮することを改めて考えさせられます。



筆者紹介



柳鍾宇 (ユ ジョンウ)

GIP Korea代表弁理士。ソウル大学電気工学部を卒業。2009年弁理士登録。弁理士になる前は(株)LGディスプレイで設備購買及び技術営業の日本担当を務める。

前職の特許事務所では、最初は(株)サムスンの特許明細書作成／中間処理／外国出願などを行い、後に日本企業の韓国出願を担当。趣味はゴルフ。

【参考】 www.unitedgips.com

